

# 産直白書 2024年版



農業に  
情熱を

Passion for Agriculture



株式会社農業総合研究所  
Nousouken Corporation

# 目次

## ● ご挨拶

## ● 冬季（24年1月～24年2月）

- ブロッコリー（1月） 販売は増加し、価格高騰は落ち着き例年並みに
- 小松菜（2月） 物価高のなかでも、高栄養価・低価格で人気上昇中

## ● 春季（3月～5月）

- いちご（3月） 「酸味」よりも「甘味」が人気。物価高でも値上げ幅はわずか
- スナップえんどう（4月） 人気が高まり、出荷量も急増中
- ブロッコリー・キャベツ（4月） 価格の高騰と、背景にある気象条件、物流コストなど
- たまねぎ（5月） 価格が前年比10%以上アップ

## ● 夏季（6月～8月）

- 桃（7月） 今年も高値傾向は継続する見通しに
- 梅（7月） 梅が歴史的不作で収穫半減し価格高騰
- 小玉すいか（7月） 販売が大幅減少するなか、新製品ピノ・ガール®の人气が急上昇中

## ● 秋季（9月～11月）

- きゅうり（9月） 値上がり傾向で、猛暑で高止まりの見通し
- シャインマスカット（9月） 売れ行き上昇中。豊作・高糖度で、香港や台湾への輸出増も
- にんじん（11月） 猛暑を克服し、にんじんの収穫量を大幅増加した生産者も

## ● 番外編

- 梨・白ネギ・大玉すいか（10月） 石破首相出身地、鳥取県産品種の注目度が上昇中

## ● 調査に協力いただいた生産者の皆様（五十音順）

※「産直白書 2024年版」は、過去に発行したプレスリリースをもとに、読み物として再編集したものです。時制などは基本的に当時のままとしています。

ご挨拶

---

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

農業総合研究所（農総研）として初めての「産直白書」を発行するにあたり、私たちの生活に欠かせない農業を取り巻く現状や、今後の方向性について、少しでも私の思いをお伝えさせていただきます。

## 猛暑のなかでの農業の難しさ

近年の傾向と変わらず、2024年も全国的に記録的な猛暑でした。この猛暑が植物にとって非常に過酷で、暑さから野菜や果物の生育が鈍化してしまったという声を多く聞きました。私は業界歴が今年で21年になりますが、もっとも暑い夏は今年だと感じます。

夏場の生産現場では、日常的な農作業であっても大変な状況にありました。まず、この暑さに人間の体が悲鳴を上げます。そのため、朝早く起きて作業をして昼は休憩、夕方から作業を再開するといった工夫をしている方々も、少なからずいらっしゃいました。日常的な負担が蓄積したことで、離農のトリガーとなった事例も少なからず見てきました。肥料や燃料など、近年の資材価格高騰は相変わらずです。こうした複合的な影響から、収益の確保がますます難しくなっている時代といえるでしょう。

## 可能性を感じるブロッコリー「指定野菜」追加決定

一方で、2024年は農業界にとって明るい話題もありました。それは、ブロッコリーが「指定野菜」へ追加が決定したこと。指定野菜は、国民生活にとって重要だと政府が指定する野菜です。新たな指定は1974年のじゃがいも以来約半世紀ぶり。ブロッコリーは、さらに広く安定的に供給されることが期待される野菜へ仲間入りをしたのです。これはたいへん印象的な出来事でした。

ブロッコリーが指定野菜に加わった背景には、国内での消費が安定的に増加しているという事実があります。人口減少している日本であっても、消費が伸びる商品づくりが可能だということの証だと思えます。生産現場でも、このような次の柱となる商品をいかに作れるか。つまり消費者に向き合い、みずからマーケットに受け入れられるための問いを立て、主体的に行動に移す生産者がますます求められるでしょう。

## 「生産者に寄り添う」農総研へ

いま農総研は「生産者に寄り添う」をテーマに、サポート体制の充実を目指しています。プラットフォームとして生産者が公平に競争できる環境づくりを進めます。さまざまな不確実性に向き合いながらも、生産者がビジネスとしてきちんと継続的に利益を出し続けられるよう、応援していきたいと考えます。

実際に、ビジネス感覚に優れた生産者は、全国で活躍しています。日々の仕事から社会の兆しや課題を察知して、高い当事者意識のもと仕事をされています。農業は作って終わり、ではありません。どうやって食べてもらうか、の視点を持っているか否かは、非常に大きな違いだと実感します。

農業には販売者、生産者、物流会社、消費者とさまざまなステークホルダーが存在します。その

なかで、もっとも立場が弱いのは生産者です。ですから農総研は、売る支援だけでなく、売れるための仕組みづくりで生産者に寄り添います。生産者の近くの現場、気持ちがわかりあえる距離で、価値を生み続けられるよう、いろいろな仕組みを整えているところです。

さらに、こうした生産面へのアプローチと同時に、流通・消費面へのアプローチも重要と捉えています。多くの小売店できちんと店舗数と売り場占有率を高めていくこと、スーパーマーケット以外の業態への展開などは着実に準備を進めています。生産者が農業を続け、ビジネスとして拡大するためには、何よりもまずは消費者に実際に食べてもらう必要があります。そのために、生産・流通・販売・消費の最適なあり方とは、具体的にどういう仕組みが求められているのか。中長期的な視点で構築中です。NTTアグリテクノロジー社との資本業務提携契約もこの一環です。

### 「豊作貧乏」をなくしたい。持続可能な農業の未来へ

産直白書を通じ、農業が抱える実態や課題、私たちが考える未来の農業像について多くの方々に関心をお持ちいただければ幸いです。

末筆ではありますが、皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げ、私からの挨拶とさせていただきます。

敬具

株式会社農業総合研究所 代表取締役会長CEO

及川 智正



冬季（1月～2月）

---

# ブロッコリー



2024年1月

ブロッコリーの販売額は、当社の取り扱いでも着実に増えてきています。直近のシーズンを比較すると、2022年8月ー12月と2023年の出荷量を比較すると、実に88.9%の増加を見せています。筋トレブームなどを追い風に、ブロッコリーの販売は今年も増加し続けるものと見られます。

こうしたブロッコリーブームを受けて、農林水産省もブロッコリーを国民の生活上重要な野菜である「指定野菜」(※)に追加する方針を固め、2026年度からの適用されることになりました。

また当社取り扱いのブロッコリー価格の推移をみると、2023年8月に158円だった単価が、10月には228円まで高騰。この1月には159円と例年より若干安い程度に落ち着いています。

昨秋の高騰は、猛暑の影響によるものです。記録的な猛暑が続き、ブロッコリーの品質が低下、さらに収穫量も激減したことで、品不足が生じ、価格が急激に上昇したのです。すでに価格は落ち着きましたが、冬の気候次第では、再び高騰する可能性もあります。

## 販売量が増加し続ける理由

ブロッコリーの販売が増えているのには、生活者・生産者の両面からの理由があります。

生活者の側の理由としては、近年の「筋トレブーム」やライフスタイルの変化を背景に冷凍野菜の需要があります。

ブロッコリーにはたんぱく質やビタミンB6など、筋トレに欠かせない栄養素が豊富に含まれています。

たんぱく質は筋肉や臓器、皮膚、髪の毛など体の組織を構成するのに欠かせません。またビタミンB6はたんぱく質や脂質などの代謝に必要な栄養素です。

また、国産ニーズが高まっている冷凍ブロッコリーは長期保存が可能で手軽に調理ができるので忙しいライフスタイルを持つ人たちを中心に需要が伸びています。

このようにブロッコリーは、筋トレで体を動かしたり筋肉を増やそうとしたりする人たちや忙しいライフスタイルを持つ人には最適の野菜なのです。

そして、生産者にとってもブロッコリーを積極的に作りたい事情があります。ブロッコリーとキャベツの栽培方法はかなり似ています。

ですが、キャベツはブロッコリーに比べて、はるかに重いのです。そのため、生産者が収穫するには大変な労力が必要です。高齢化した生産者、あるいはアルバイトのスタッフには負担が大きすぎるのです。

またキャベツの単価はブロッコリーよりも安いいため、生産者が採算をあわせにくいという事情もあります。これらの理由からキャベツからブロッコリーに転換する生産者が増え続けているのです。

今年のブロッコリーの品質ですが、猛暑の影響も収まり、例年通りの高品質なものとなっています。急激な気候変動などがない限り、価格も落ち着き、高品質なブロッコリーが手に入れられる状況と言えます。

※指定野菜とは、野菜のうち特に消費量の多いものを国が定めています。指定産地は、その指定野菜を毎年作ってくれる規模（きぼ）の大きな産地を国が指定しています。指定野菜の価格（かかく）が安くなった場合に、来年も野菜を作ってくれるように指定産地の農家に安くなった分だけ支払う制度（せいど）があります。指定野菜は、キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、たまねぎ、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ばれいしょ、ピーマン、ほうれんそう、レタスの14品目です。指定産地は890産地（令和3年5月7日現在）指定しています。

■農林水産省：[https://www.maff.go.jp/j/heya/kodomo\\_sodan/0410/02.htm](https://www.maff.go.jp/j/heya/kodomo_sodan/0410/02.htm)

調査期間：1月5日～1月24日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸でのブロッコリーの販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# 小松菜

2024年2月



昨年（2023年）、小松菜は200円近くまで価格が高騰しました。ですが、現在は98円程度と例年よりも安価な水準に落ち着いてきています。

価格が落ちてきた最大の要因は、今年（2024年）の暖冬です。暖冬のおかげで小松菜の生育が良くなり、生産量が増えているのです。今年は2月以降も寒さが落ち着いていることから、小松菜の生産は順調なため、価格はさらに下がる可能性もあります。

品質は例年と遜色ない出来となっています。生活者にとっては、「小松菜がお買い得」という状況が続きそうです。

## 小松菜の生産が近年、特に増えている理由

暖冬に加え、小松菜の価格が落ち着いているもう一つの要因は、小松菜を生産する農家が増えていることです。「農家の直売所」の出荷データを見ても、2023年の販売量は前年と比べて、45%の増加となっています。

小松菜の生産者が増えた最大の理由は、小松菜が育てやすいからです。さらに種まきから1ヶ月程度で収穫できるので、年に何回も収穫できる効率の良さも挙げられます。一般的な農産物では、連続して生産すると作物に病気が出るなど様々な不都合が生じることがあります。ですが、小松菜はそうした不都合が生じにくいのです。

## 物価高も小松菜の人気を後押し、学校給食でも人気

生活者から小松菜の人気が高まっている理由の一つが、「栄養価が高いのに、価格が安いこと」です。小松菜の栄養価はほうれんそうと似ています。ですが前述の通り、小松菜のほうが作りやすいため、価格が10%から20%低い傾向にあります。物価高の昨今、小松菜はまさに「ありがたい存在」なのです。

こうした「高栄養価・低価格」の影響で、小松菜は学校給食でも人気となっています。今回の調査で当社のヒアリングに協力してくださった生産者の千葉県・印西市でも学校給食に納入することが増えているとのことでした。

調査期間：1月1日～1月31日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での小松菜の販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

春季（3月～5月）

---

# いちご

2024年3月



## 「甘い品種」が「酸味が強い品種」より人気に

近年いちごは「酸味が強い品種」よりも「甘さが強い品種」が人気となっていることが明らかとなりました。

「甘さが強い品種」として特に大きな伸びを見せているのが、「おいCベリー」です。当社の昨年（2023年）の出荷量は、一昨年と比較して220%と大きな伸びを見せています。

「おいCベリー」はその名の通り、ビタミンCがいちごのなかでも特に多いのが特徴です。

7粒で1日に必要なビタミンCを摂取できるほどです。濃赤色で光沢のある果肉は糖度が高く、食味も良好で、日持ち性も優れています。

いちごの代表的な品種といえば「紅ほっぺ」が挙げられます。比較的小さく、果肉は中心部まで淡赤色で断面が美しいことから、ケーキによく用いられています。酸味がやや強いのが特徴です。

「紅ほっぺ」の昨年の「農家の直売所」での出荷量は一昨年（2022年）と比べて、94%とわずかながら減少しています。ビタミンCが多く甘味が強い「おいCベリー」の伸びが突出していることがよくわかります。

## 価格はわずかに上昇も、コスト上昇を吸収できず

「農家の直売所」のデータによると、昨年11月の平均単価（1パックあたり）は655円（1年前と比較して109%）、12月は722円（同108%）、今年1月が720円（同100%）と推移しています。1年前と比べて、大きくても1割弱の値上げにとどまっています。

ですが、いちごはハウス栽培のため、暖房費が相当かかります。また、収穫後にもビニールなどの梱包資材や搬送も必要ですが、これらの経費も大きく値上がりしています。

こうしたコスト上昇もかかわらず1割弱の価格上昇にとどまっていることから、生産者の収益性が悪化している実態が垣間見えます。

調査期間：1月1日～1月31日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# スナップエンドウ



2024年4月

昨年（2023年）の11月から今年（2024年）1月のスナップエンドウの出荷量はその前の年と比べて、125.0%と大きく伸びていることが明らかとなりました。昨今のスナップエンドウの人気の裏付けられた格好です。

## 生活者から見たスナップエンドウ人気の理由

スナップエンドウが登場したのは1970年代と言われています。それまでサラダやお弁当で主に使われていたのが絹さやエンドウやいんげんですが、こうした豆類のなかでも、近年はスナップエンドウの人気の高まってきています。

生活者から人気の理由は「さやごと食べられる」という、味と食べやすさです。また、筋を取ってゆでるだけで調理が済むので、手間も少なく済みます。このため、忙しい家庭にとっては、弁当の具材として助かる存在となっているのです。

## 生産者に人気の理由①：収穫量

同じ収穫にかかる時間でスナップエンドウは絹さやエンドウの3倍以上収穫できると言います。生産者の高齢化が進むなかで、収穫作業の軽減は生産者の大きな課題となっています。収穫作業の負担が少ないスナップエンドウは、生産者にとってもありがたい存在なのです。

## 生産者に人気の理由②：生産コスト

絹さやエンドウはおせち料理に欠かせない素材です。そのため、毎年12月に価格が高騰する傾向があります。ですが正月を過ぎると、反動で価格は急降下します。価格変動が小さいスナップエンドウのほうが、生産者の経営は安定します。

## 生産者に人気の理由③：寒さに強い

スナップエンドウは寒さに強いいため、栽培しやすいことも人気の理由です。たとえば代表的な豆類であるいんげんの場合、いんげんは比較的温暖な気候を好むので、冬にいんげんを栽培しようとする、温度調整が必要です。

ですが、昨今の原油高によって、暖房に要する費用は著しく上昇しています。そのため、生産者は冬のあいだは、同じ豆類でも、いんげんではなくスナップエンドウを好んでつくるようになっているのです。

実際、当社の「農家の直売所」の出荷データを見ますと、昨年11月のいんげんの出荷量は前の年と比べて183%と大幅に増えています。暖冬の影響で冷害が少なかったため、収穫が増えたと考えられます。

気温が下がってくる12月だと前年比63%、1月は22%と大きく減少しています。暖房コストが上昇しているため、いんげんの栽培を見合わせて、スナップえんどうに転じた生産者が多かったことも原因のひとつと考えられます。

調査期間：2023年11月1日～2024年2月29日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# ブロッコリー・キャベツ



2024年4月

春の葉物野菜全般が価格高騰しています。

特に高騰が著しいのが、ブロッコリーです。ブロッコリーは4月の出荷量は1年前の同じ月（2023年4月）と比べて今月は18.6%増加しているものの、価格は22.1%上昇しています。またキャベツも出荷量は53.1%と大幅に減少し、価格も18.9%上昇しています。

## 価格高騰の理由1：暖冬と寒波と曇天が重なったため

今年（2024年）は全国的に暖冬でした。そのためブロッコリーやキャベツは生育が早くなり、収穫も早まりました。そのため、春の時期の収穫量が少なくなっていました。

価格高騰には暖冬後に寒波が到来、さらに曇りの日が多いことも、大きく影響しています。収穫が早まり、畑で次の栽培をしようとしたところ、寒波で気温が下がり、さらに日照時間が短くなったことで、生育が遅れ、十分な収穫量を確保できなくなり、価格が高騰してしまったのです。

いわば通常では重ならない事象が今年は3つも重なってしまったことが、価格高騰の原因となっているのです。

## 価格高騰の理由2：「指定野菜」入りでブロッコリー人気急上昇

ブロッコリーに関しては2026年から「指定野菜」に加わることが農林水産省から発表されたことも一因とみられています。「指定野菜」とは農林水産省が「消費量が多く、国民生活に重要」とした野菜です。現在はキャベツなど14品目が指定されています。

ブロッコリーは食物繊維やビタミン、ミネラルなど栄養が豊富に含まれています。茹でただけで食べられるので、調理も手軽です。またブロッコリーにはタンパク質も多く含まれていることで、筋肉トレーニングに打ち込む人々にも人気となっています。

「指定野菜」となったことでブロッコリーの魅力にさらに注目が集まっています。もともと生産量は多かったものの、生産が人気上昇に追いつかず、価格が高騰しているようです。

## 価格高騰の理由3：「物流の2024年問題」と円安などで物流コストが上昇

「物流の2024年問題」とは今年4月からトラックドライバーの年間時間外労働時間が960時間に制限されることによって発生する問題のことです。トラックドライバーの労働時間が短くなったことで、トラックドライバー不足が発生、物流コストが上昇しています。加えて、昨今の円安や原油高も物流コストの上昇に追い打ちをかける状況です。

このまま物流コストが大幅に上昇する一方で、物流コストの上昇分をそのまま農産物価格に転嫁すれば、価格が高くなりすぎて売れ行きが大きく落ちることも予想されます。

そこで生産者はこれまでは東京などの大都市圏に送っていた農産物を、近隣の都市圏に多く回すようになっています。輸送距離が短ければ、物流コストの負担が軽減されるからです。

これらの理由が同時に重なったことで、東京などの大都市圏に流通する葉物野菜の量が減少し、価格高騰につながっている格好です。

### **キャベツがブロッコリーよりも価格変動しにくい理由**

当社のデータを見ても、価格上昇の幅はブロッコリーよりキャベツの方が幾分、緩やかになっています。これはブロッコリーよりもキャベツのほうが長持ちするためです。ブロッコリーは「足が早い」ため、収穫したらすぐに出荷しなくてはなりません。ですが、キャベツはブロッコリーと比べると長持ちするため、収穫時期を調整しやすいためです。

調査期間：1月1日～4月21日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# たまねぎ



2024年5月

たまねぎ、そして新たまねぎの価格はいずれも前年（2023年）比10%以上値上がりしていることが明らかとなりました。

## たまねぎの価格は前年比で10%以上アップ

農業総合研究所が全国のスーパーマーケットで展開している2,000店舗以上の「農家の直売所」の出荷データを調査したところ、たまねぎの価格は今年（2024年）1月が260.4円（前年比118.1%）、2月は250.8円（前年比113.0%）、3月は239.8円（前年比113.6%）といずれの月も前年比で1割以上も価格が上昇しています。

価格上昇の原因としては、日本最大の産地である北海道で猛暑のため、収穫量が少なく小玉傾向になったこと、全国有数の産地である兵庫県・淡路島でも収穫時期に雨の日が多くなったため、腐りやすくなり収穫量が減ったこと、そして昨今の物価高で生産・物流コストが高まっていることなどが挙げられます。

## 新たまねぎの価格も前年比で10%以上アップ

いま、新たまねぎの出荷がピークを迎えています。「農家の直売所」の新たまねぎの出荷データによると、今年4月の出荷量は前年と比べ25.5%減少、価格は18.4%上昇していることが明らかとなりました。

原因ですが、今年は産地の兵庫・淡路島では生育時期に雨の日が少ない日が続きました。

雨が少ないと、たまねぎの生育は遅くなってしまいます。そのため出荷量が減少し、価格も上がったとみられます。

## 人気が急上昇している淡路島産たまねぎ

全国のスーパーマーケット2,000店舗以上の「農家の直売所」のたまねぎの出荷データで、昨年度最も取扱量が多かったのが、兵庫・淡路島産のたまねぎです。

日本最大のたまねぎの産地としては、北海道が知られています。ですが、大阪や神戸などの関西の都市では特に淡路島産も好まれています。新たまねぎは鮮度が重要ですが、産地との距離が近く鮮度を保ちやすいこと、たまねぎも輸送コストが少なく済むためです。

こうした淡路島産のたまねぎのなかでも、特に注目を集めているのが特別栽培（※）の「あやたけ」です。「あやたけ」は株式会社池上農場が展開する淡路島産たまねぎの独自ブランドです。味も格別で「甘い」、「匂いが良い」と高い評価を得ています。

「あやたけ」は、オリジナルの竹粉を混ぜた肥料を使って栽培しています。竹の持つ殺菌作用によって、病気になりにくく、質の良いたまねぎが育つのです。もともとは淡路島で放置竹林が増えたため、その活用方法を考えたことがきっかけでした。

生産者である株式会社池上農場の代表取締役・齋藤亜紀美さんの経歴もユニークです。以前は福島県に住んでいましたが、東日本大震災をきっかけに実家がある淡路市に自主避難。2011年に父と一緒に、たまねぎ栽培を行ったことが農業を始めたきっかけです。

ユニークな栽培方法や美味しさで、関西のニュース・情報番組を中心に多くのメディアで取り上げられるなど、まさに注目の存在です。

※その農産物が生産された地域の慣行レベル（各地域の慣行的に行われている節減対象農薬及び化学肥料の使用状況）に比べて、節減対象農薬の使用回数が50%以下、化学肥料の窒素分量が50%以下、で栽培された農産物です。（出典：農林水産省 [https://www.maff.go.jp/j/jas/jas\\_kikaku/tokusai\\_a.html](https://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/tokusai_a.html)）

調査期間：1月1日～4月30日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

夏季（6月～8月）

---

# 桃

2024年7月



## 2021年と比べ2023年は10%近く上昇した月がほとんど

桃の旬の季節での出荷データをまとめたところ、以下の表となりました。

	6月	7月	8月	9月
2021年 平均価格	480.9	512.4	567.1	462.5
2022年 平均価格	508.1	553.9	591.8	604.7
2023年 平均価格	522.2	571.0	584.2	582.9
対前年比	102.8%	103.1%	98.7%	96.4%
2021年と2023年の比較	108.6%	111.4%	103.0%	126.0%

昨年（2023年）の8月、9月はその前年と比べて、わずかに安価になっているものの、2023年と2021年の価格を比較すると、上昇傾向であることが明らかとなります。2024年6月の平均価格は554.1円となっており、6月の平均価格について過去最高の高値となっております。

価格上昇の原因は、肥料や消毒剤などの高騰です。農林水産省によると、2023年の農業物価指数によると、2020年の価格を100とした場合、肥料は147と過去最高だった2022年から16.2ポイントも上昇しています。また農薬も112.9（前年比10ポイント上昇）と高騰しています。

## 今年（2024年）の桃の見通し

今年は昨年より開花が少し遅くなり、開花後の4月頃が高温で推移したため生育は順調です。夜温が高いと、色付きが悪く、取り遅れになる可能性が高く正品率の低下が予想されます。近年、クビアカツヤカミキリムシの被害が多数発生しており、今年はカメムシの飛来が多く例年より収量は少なくなると予想しています。糖度などは今後の梅雨の影響次第になります。雨量が少なすぎると玉が太らず小玉傾向となり、雨量が多いと水っぽく糖度があがりません。

生産者によると「肥料などの価格上昇分を十分転嫁しきれていない」とのことで、価格が例年並みに落ち着く兆候は見当たりません。桃は今年も「高値安定」となることが確実と見られます。

調査期間：2021年6月1日～2024年6月24日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# 梅

2024年7月



今年（2024年）の梅の販売数ですが、歴史的な落ち込みとなっています。昨年（2023年）と比べて、5月は56.0%、6月は66.2%の収穫にとどまっています。収穫量の減少に伴い、価格も上昇しています。昨年5月は644円だったのが今年は746円と115.7%に、昨年6月は646円だったのが今年は907円と140.4%に達しています。

## 歴史的不作の原因①：暖冬で受粉困難に

日本最大の梅の産地である和歌山の主力品種・南高梅は自家受粉できない品種です。違う品種の梅の花粉をミツバチに運んでもらい、受粉して初めて実がなるのです。今年は暖冬だったため、例年より大幅に早く南高梅は開花しました。ですが、暖冬で他の梅の品種と開花時期がずれてしまったため、受粉ができなくなってしまったのです。

## 歴史的不作の原因②：暖冬によりカメムシなど害虫が増加

暖冬は梅にさらなるダメージをもたらしています。それがカメムシなどの害虫の増加です。通常、冬の寒さにさらされることでカメムシの数は減少します。ですが、今年の冬は暖冬だったため、例年より多くのカメムシが冬を越すことができました。結果、例年以上のカメムシが梅を襲うことになったのです。加えて、カメムシ以外の害虫も暖冬で多く生き残ったことで、梅の木を侵食しました。

## 歴史的不作の原因③：3月の雹

日本一の梅の産地・和歌山では、3月に雹が降りました。この雹で多くの梅が傷つき、売り物にならなくなってしまいました。

## 梅干しへの影響は

6月の梅干しの価格は昨年とほとんど同じに留まっています。梅干しは1年など長期間かけて作られるので、今年の不作が即、価格に反映しないためです。ですが、これから今年収穫の梅に置き換わっていくに従って、徐々に梅干しの価格も上昇していくものと見られます。

調査期間：2023年5月1日～2024年7月9日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、生産者へのヒアリングを基に導出

# 小玉すいか



2024年7月

2023年のすいかの販売数ですが、一般的に最も馴染みのある「大玉すいか」は2022年と比較して、72.4%と大きく減少しています。

農林水産省の調べによると、すいかの作付面積は30年前のピーク時と比べ、4分の1程度にまで落ち込んでいます。今回の農業総合研究所のデータでも、すいか人気の長期低落傾向が裏付けられた格好です。

対照的に販売数を大幅に増やしているのが、ピノ・ガール®という品種です。2023年はその前の年と比べ、146.8%と増加を見せています。農業総合研究所では今年の夏もピノ・ガール®の人気は、続くものと見ています。



ピノ・ガール® (写真提供：ナント種苗株式会社)

## 人気の理由：小さなサイズ、そしてタネまで食べられること

16年の歳月を掛け、すいかのタネを小さくする開発を成功させ、タネまで食べられる小玉すいか「ピノ・ガール®」を発表した、ナント種苗株式会社（本社：奈良県橿原市、代表取締役社長 森井哲也）によると、大玉すいかの重さが8キロから10キロに比べてピノ・ガール®は重さが2キロ程度の小玉すいかです。このため、冷蔵庫にも無理なく入れることができます。またサイズが小さいので、単身世帯など家族の数が少ない世帯でも無理なく食べることができます。

大玉すいかが「冷蔵庫に入らない」「家族で食べきれない」といった理由で敬遠されるようになったのとは対照的です。

またピノ・ガール®のタネは普通の小玉すいかの約4分の1で固くないため、タネを気にせずに食べることができるのが特徴です。ということです。



写真提供：ナント種苗株式会社

調査期間：2022年6月1日～2024年7月18日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

秋季（9月～11月）

---

# きゅうり



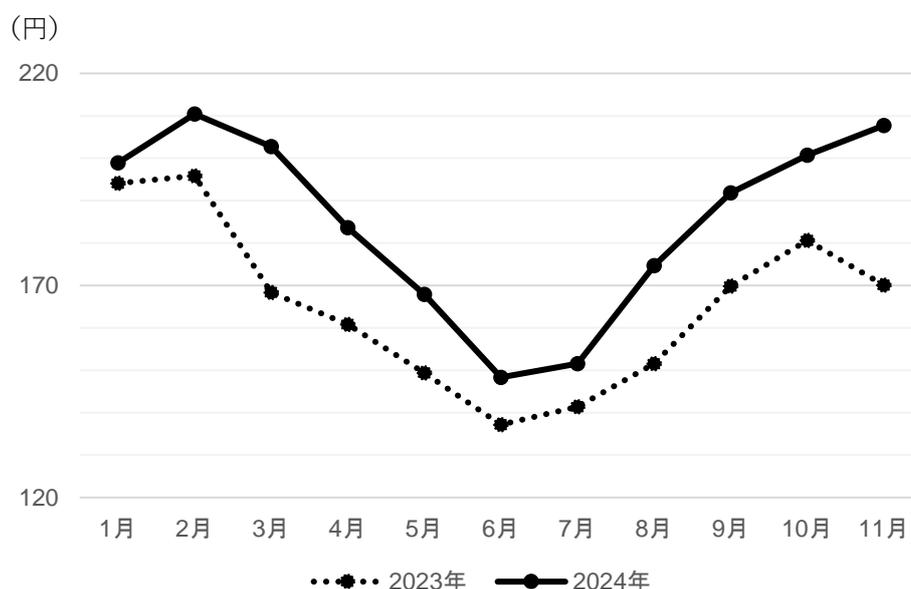
2024年9月

今年（2024年）5月～8月のきゅうりの平均価格は160.6円でした。昨年（2023年）の同時期は144.9円でしたので、前年比10.9%の値上がりとなっています。また出荷量は5月で前年比15.3%増、6月は同48.5%増、7月は同8.6%増、8月は同9.3%増となっています。

きゅうりは夏野菜なので、本来、暑さには強い特徴があります。ですが今年はそうしたきゅうりの性質でも耐え切れない猛暑であることから、収穫量は増えず、価格は高止まりするものと見られます。

そして現在でも9.3%の値上がりとなっているきゅうりですが、この値上げ幅では生産者が光熱費・肥料代・輸送費・人件費などの上昇を十分に吸収できているとは言い難い状況です。

図：きゅうりの平均価格の推移（2023年、2024年）



※農業総合研究所「農家の直売所」データによる集計  
※12月はデータなし

調査期間：2024年5月1日～2024年8月31日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、生産者へのヒアリングを基に導出

# シャインマスカット



2024年9月

農業総合研究所で8月のシャインマスカットの取り扱い量は2023年はその前の年と比べ、228.2%と増加しており、2024年は昨年と比べ、147.9%増加しています。また今回の調査にご協力いただいたJA中野市（長野県中野市）でも、10年前の30億円弱から、現在は70億円を超え、2倍以上の伸びを見せるほどの人気となっています。

## シャインマスカットの売れ行きが増えている理由は3つあります

理由1：皮ごと食べられて種がなく食べやすいことです。これまでの日本のぶどうと異なる特性からぶどうの消費量自体を増加させました。近年では巨峰など伝統的なぶどうが減少傾向であることもあり、シャインマスカットを軸にぶどう全体の価値を向上させる原動力となっています。

理由2：生産者が増えていることです。シャインマスカットは収益性が高いため、新規就農などの際には、シャインマスカットを選択する生産者が増えています。また、巨峰や稲作からシャインマスカットに栽培品目を変える生産者も増えています。先述のJA中野市でも、シャインマスカットの生産者はこの10年で100人以上増えているといいます。

理由3：香港や台湾を中心に輸出用も増えています。主に贈答に用いられているため、特に品質の高いものが好まれています。

## 今年の見通し

今年の記録的な猛暑の影響も見られず、シャインマスカットは順調に育っています。そのため、例年より糖度も高く、また豊作が見込まれます。

旬の時期ですが、猛暑の影響で収穫時期が早まっています。このためJA中野市のものだと例年9月下旬が食べごろなのですが、今年は1週間ほど早まるものと見られています。

## シャインマスカットにかわる人気のぶどう

JA 中野市によると鮮やかな赤系のぶどう「クイーンルージュ®」がシャインマスカットより甘く、種がなく皮ごと食べることができ皮を食べるときに気にならない長野県のオリジナル品種がとても人気で生産量も増えているということです。



クイーンルージュ® (写真提供：JA 中野市)

調査期間：2024年8月1日～2024年8月31日

調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、スーパーマーケット担当者や生産者への当社の担当者が直接のヒアリングを基に導出

# にんじん

2024年11月



今年（2024年）は歴史的な猛暑により、多くの野菜が深刻な不作、さらに価格高騰となりました。にんじんもその例外ではありませんでした。ですが、今では猛暑の影響は落ち着きを見せています。

## 猛暑を克服した生産者の事例

こうした逆風をものともせず、にんじんの収穫量を大きく増やしている生産者がいます。それが千葉県香取郡多古町の有限会社ゆうふぁーむ（以下、「ゆうふぁーむ」）です。

近年、猛暑は「夏の恒例行事」と化した感すらあります。「ゆうふぁーむ」も昨年（2023年）は猛暑の影響で、収穫を3割以上も落としました。ですが、昨年の教訓をもとに取り組んだ結果、今年は大幅に収穫量を増やすことができたとのことです。

猛暑のなかでも収穫を増やせた理由は、まず「水が貯まる資材」を畑に用いたことです。猛暑で畑は乾燥しがちとなります。ですが、おむつにも用いられている資材を畑に設置することで、畑は乾燥しにくくなります。

もうひとつの理由は、土の入れ替えを行ったことです。土を入れ替えることで、畑の排水が改善します。夏には猛暑と同時に、大雨にも見舞われます。水捌けの悪い畑だと、にんじんは腐ってしまいます。猛暑対策と合わせて、大雨対策をとったのです。

そして最後の対策は、人員を増やしたことです。上記の施策を実施するには、どうしても人手がかかるからです。

「ゆうふぁーむ」は農家出身ではない3人で運営されている農業法人です。研修で農業に興味を持った3人が、30代で研修先だった生産者を事業承継しました。

3人は元々、農業とは縁のゆかりもなく、都心で暮らしてきました。当初は栽培した作物が病気になり出荷できなくなるなど、多くの失敗を乗り越えながら着実に農業の技術を身に付けてきました。

3人で生産する作物を分担しながら、協力して職場の働きやすい環境作りや農村の活性化に向け日々奮闘しています。

農薬の使用を必要最低限に抑えた「特別栽培」に取り組んでいます。農産物の付加価値を高めながら、猛暑対策にも工夫を凝らすことで、生産者のロールモデルとなっています。

## 「有限会社ゆうふぁーむ」概要

住所：千葉県香取郡多古町西古内 1044-53

<https://yufarm2015.wixsite.com/my-site>

総栽培面積：30ha



取材協力：有限会社ゆうふぁーむ 専務 川島健次さん

調査期間：2024年10月7日～2024年10月31日

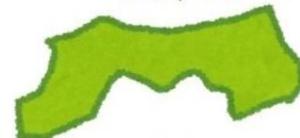
調査方法：当社が全国2,000店舗以上のスーパーマーケットで展開する「農家の直売所」、及び産直卸での販売データ、及び、生産者へのヒアリングを基に導出

## 番外編

---

# 梨・白ネギ・大玉すいか

人気調査  
鳥取野菜



2024年10月

## 人気品目1：鳥取のオリジナル品種の梨「新甘泉（しんかんせん）」

「鉄道好き」で知られる石破新総理もきっと応援しているに違いない。そう思わせる新幹線と同じ読み方の梨が、鳥取にあります。

それが「新甘泉（しんかんせん）」です。名前の通り、高糖度なのが特徴で、早生の赤梨としては最高クラスの甘さを誇っています。鳥取県園芸試験場が育成した、鳥取県のオリジナル品種です。

いま、梨の価格が高騰しています。高騰の原因は燃料費や肥料、人件費などの高騰だけではありません。ひとつは、生産者の高齢化などで、収穫量が減っていること。もうひとつは香港などへの輸出が急増しているためです。輸出の梨は主に贈答用に用いられているため、味・見た目などすべてが最高品質のものです。こうした要因が重なって、梨の価格が高騰しています。

こうした梨を手にしにくい状況にあっても、甘さ抜群の「新甘泉」の人気は確実に高まっています。

## 人気品種2：白ネギ

鳥取は西日本有数の白ネギの産地として知られています。この白ネギの栽培で難しいのが、畝（うね）をつくることです。畝とは、畑で作物を作るために細長く直線状に土を盛り上げた箇所です。白ネギの「白い部分」をつくるために、土を盛り上げ、ネギが埋まっている部分をつくらなくてはならないのです。

ネギの成長に合わせて、畝は何度も作り直さなくてはなりません。一般的なケースでは、約5回はつくらなくてはなりません。ですが畝をつくる過程で、どうしてもネギを傷つけることがあります。

今回、取材にご協力いただいた株式会社米子青果（鳥取県米子市）によると、白ネギについて猛暑や水不足などが理由で夏の栽培が難しくなっており、サイズなど規格を変更した「ミニ白ネギ」を製品化し、一般的な白ネギよりも何センチか短いいため、畝を作る回数を減らすことができるため、栽培の負担を減らすことができるので値段も安くでき、この「ミニ白ネギ」の取り扱いを増やす取り組みが行われています。

## 人気品種3：大玉すいか

大栄すいかと倉吉すいかはいずれも鳥取を代表する大玉すいかです。

大栄すいかは、西日本有数のスイカの産地である北栄（ほくえい）町（旧大栄町）を主産地として生産されています。形状、品質にバラツキが少なく、安定した品質のスイカです。

倉吉すいかは、その名の鳥取県倉吉市で生産されています。平均糖度12度以上の高糖度で内側と外側の糖度差が少ないのが特長です。

近年、冷蔵庫に入れやすい、少ない人数の家族でも食べやすいといった理由で、昔ながらの大玉より小玉のすいかほうが、人気が高まっています。ですが、鳥取の大玉すいかは品質の高さなどから人気となっており、首都圏にまで出荷が拡大しています。

# 調査に協力いただいた生産者の皆様

- 青山 大介 株式会社マーコ 野菜事業部（愛知県田原市）
- 遠藤 剛 株式会社アグリガーデン（埼玉県深谷市）
- 川島 健次 有限会社ゆうふあーむ 専務（千葉県香取郡多古町）
- 木多 浦清子 （和歌山県伊都郡かつらぎ町）
- 北中 良幸 株式会社きたなかふあーむ 代表取締役（滋賀県野洲市）
- 齋藤 亜紀美 株式会社池上農場 代表取締役（兵庫県淡路市）
- 櫻井 修一 櫻井農園（千葉県印西市）
- 松川 知憲 株式会社松川農園 代表取締役（和歌山県日高郡みなべ町）
- 宮迫 隆憲 株式会社カネキヨファーム（鹿児島県垂水市）
- 吉川 修一 株式会社ヨシカワ（埼玉県深谷市）
- JA 中野市（中野市農業協同組合）（長野県中野市）
- ナント種苗株式会社（奈良県橿原市）
- 株式会社米子青果（鳥取県米子市）

※五十音順・敬称略



株式会社農業総合研究所  
Nousouken Corporation